

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月30日現在

機関番号：32670  
 研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2008～2012  
 課題番号：20320107  
 研究課題名（和文）顕密・真宗聖教による中世仏教の統合的な教学構造と「仏法」観に関する研究  
 研究課題名（英文）Study on Buddhist view of the teaching and study of medieval Buddhist scriptures.  
 研究代表者  
 永村 眞（NAGAMURA MAKOTO）  
 日本女子大学・文学部・教授  
 研究者番号：40107470

## 研究成果の概要（和文）：

日本中世の仏教は、必ずしも「宗」という枠におさまるものではない。中世仏教の実態を語る顕密・真宗にわたる「聖教」を素材として、それらを生み出した寺院社会における寺僧集団の修学活動について検討を加えた。その結果として、従来は特定の「宗」のみを伝持したとされる諸寺院において、諸「宗」の基礎にある釈迦一代の教説としての「仏法」への強い認識を確認することができた。さらに「仏法」への認識を踏まえた諸宗教学を学ぶ具体的な姿とその具体的な痕跡が明らかとなった。

## 研究成果の概要（英文）：

The Buddhism of Japanese medieval times did not necessarily fit in the frame sect ("宗"). The priest group's study activities in temple society were considered by being made from the "sacred teachings" which tells the Buddhist actual condition medieval times. In the temples supposed that specific sect is conventionally introduced as the result, the recognition to the "Buddhism" in the foundation of many sect was able to be checked. Furthermore, the concrete figure which studies the education based on the recognition to "Buddhism" became clear.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2009年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2010年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2011年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2012年度	2,500,000	750,000	3,250,000
総計	15,000,000	4,500,000	19,500,000

研究分野：人文

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：仏法観、聖教、三論宗、真言宗、真宗

## 1. 研究開始当初の背景

日本古代・中世の仏教がたどった足跡を、「宗」という枠を通して考えるというのが、極めて一般的な認識である。しかし「宗」が今日の用語としての教団と同義として、制度的

にも確立するのは江戸時代以降のことである以上、中世寺院に相承された教学を、「宗」という枠のなかでとらえることはできない。あくまで「宗」とは、釈迦一代の教説つまり「仏法」を、衆生の「機」に応じて教化する

ための枠組であり、その根底に「仏法」が存在することは言うまでも無い。そこでは中世仏教を「宗」という枠内でのみとらえることなく、その基礎としての「仏法」をめぐる認識を踏まえて「宗」の教学に注目する必要がある。

## 2. 研究の目的

中世における諸寺院において、「一切経」に代表される経・律・論と中国において撰述された疏釈が拠るべき仏典としてあったことは確かである。しかし寺僧集団による日常的な教学活動のなかで、「仏法」を様々な側面から理解するにあたり撰述されたのが「聖教」である。この「聖教」こそ、中世の寺僧集団が「仏法」を如何に受容したかを如実に物語るものである。そこで諸寺院において相承された教学の内実を示す「聖教」を主要な素材として、中世仏教における「宗」という枠を越えた「仏法」のあり方とともに、諸「宗」にわたる教学構造について検討を加えることにしたい。

## 3. 研究の方法

本研究は、諸寺院に伝来する多様な「聖教」の調査・蒐集を前提として、それらが生まれた法会・修学の間という視点から、「聖教」が諸寺院の教学に果たした役割を検討し、さらに「宗」という枠を越えた「仏法」観への認識を探ろうというものである。具体的には、奈良東大寺に伝来する顕教「聖教」（法相、華嚴、三論、俱舎、因明）、京都醍醐寺の顕密「聖教」（真言・三論、鈴鹿専照寺の宗乗・余乗（俱舎、天台、法相、華嚴、律）にわたる「聖教」、神奈川県立金沢文庫に架蔵される称名寺伝来の顕密「聖教」、さらに諸寺（河内金剛寺、伊予国分寺、伊勢専修寺、近江善徳寺、武蔵護国寺等）に伝来する「聖教」を調査の対象とした。まず多様な「聖教」が生み出された諸寺における教学活動の復元を試み、その中で寺僧の手になる「聖教」が具体的に如何なる機能を果たしたのかを検討した。さらに「聖教」が機能した側面において、特徴的な教学のあり方とともに、その根底に如何に「仏法」がとらえられていたかを探ることになる。特に真言宗醍醐派惣本山である醍醐寺における三論教学、真宗諸寺における真宗教学以外の余乗の存在は、個々の寺院社会に特徴的な現象であるとともに、そこに相承されるに相応しい存在意義があり、それは諸寺院の掲げる「宗」では説明しがたい「仏法」観を語る。これらの成果を定期的に開催する研究会において報告し、共有化を図った。

## 4. 研究成果

(1) 中世の寺院社会において「仏法」を如何

にとらえていたのが、本研究の主張な課題である。

(2) その解明の糸口を、真宗寺院に伝来する宗乗・余乗の聖教に求めた。つまり法然・親鸞によって、往生の術としては排除されたはずの聖道門を、敢えて「専修念仏」に基づく真宗教学と併存させて学ぼうとの修学の姿勢が見いだされた。これは南北朝期に活躍した親鸞末葉である存覚の著述に見られ、教学としての「浄土真宗」をあくまで大乘仏教としてとらえ、聖道門との対象のなかで固有の役割を主張したものであるが、その認識の根底には「宗」の大前提としての「仏法」観が明確にその姿を見せる。この「仏法」を踏まえて存覚は「浄土真宗」の固有に位置を定めたわけである。ただし「浄土真宗」を「仏法」のなかで相対的にとらえようとの存覚の認識は、当該時代に本願寺とその門徒に受容されることなく、その教説が注目されるのは近世初頭を待つことになる。

(3) また真言密教では「仏法」を顕・密に分ち、密が顕に優れたとした上で、密教部分を事相・教相の両面にとらえ、その両者の修学を祖師空海は門葉に勧めた。この事相・教相の修学は、各々が分化した後、さらに法流として細分化を遂げるなかでも、両者が一体とする意識は継承された。これは河内金剛寺所蔵「聖教」からも明らかとなるが、事相に関わる「聖教」が醍醐寺から根来寺へ、さらに根来寺から金剛寺への伝授が重ねられた。そのなかで特に醍醐寺の「報恩院」に相承された三宝院正統が重視されて根来寺において相承される一方で、根来寺では教相に関わる「聖教」が撰述され伝来し、これが逆に醍醐寺に伝えられることになる。このような寺院を越えた事相・教相の相承の実態が、伝来「聖教」から確認されるとともに、細分化を遂げる真言密教における、事相・教相一体による「仏法」修学へのこだわりを知ることができる。

(4) 諸寺院に伝来する「聖教」が転写を重ねられた経緯をたどることにより、「宗」を越えた「仏法」へのこだわりを確認することができる。明恵撰「梵網戒大事」が、「武州六浦庄称名寺」から東大寺にもたらされた事実から、明恵の顕密へのこだわりとは別に、畿内と東国をわたる密教伝授の実態、特に東国から畿内への流れを知ることができる。この広域にわたる伝授の広がり、如何に各地域における特徴的な「仏法」を形成したかが重要な検討課題となろう。

また東大寺における三論「聖教」の調査において、教判に関わる「二蔵判教」等の科文とは別に、東大寺の論義に相応しい「執金剛

神」の存在から、教説と信心とを結合させ手理解しようとする「仏法」の個性的な展開を見ることができる。

(5) 金沢文庫に保管される「聖教」のなかに見いだされる「説草」の存在は、華嚴をはじめとする顕教の受容と教化において、論義という隘路に入った教学上の議論とは別に、教学を俯瞰し対象化して平易に説く試みがなされていたことは注目される。華嚴教学と単に教説という側面のみでとらえるものではなく、教学理解を深める講説の実相を語る「説草」は、まさに「仏法」受容の具体的な姿を語るものであろう。

(6) 聖教調査の現場から、中世「仏法」をめぐる諸宗の相承を掲げる諸寺院において、他の教学との対照のなかで教判としてのこだわりとともに、その延長上に見られる個性化という一面を確認することができる。この両面こそ、「宗」という枠におさまることのない中世「仏法」の具体的な展開を示すものと言える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ① 永村 眞、「高田専修寺と高田門徒」、『二宮町史』(通史篇 古代中世)、査読無、栃木県二宮町、2008、383-516
- ② 永村 眞、「僧行」への視点、『「古事談」を読み解く』、査読無、笠間書房、2008、218-236、
- ③ 永村 眞、護国寺の仏法と法会、『護国寺とぶんきょう』、査読無、「文京区、2008、22-27、
- ④ 永村 眞、中世興福寺の学侶教育と法会、『唯識—こころの仏教』、査読無、自照社出版、2008、135-161、
- ⑤ 永村 眞、消息と聖教の筆跡論、『文化財と古文書学』、査読無、勉誠出版、2009、159-190、
- ⑥ 藤井雅子、『醍醐寺史料』にみる寺院史料と筆跡、『文化財と古文書学』、査読無、勉誠出版、235—269、
- ⑦ 永村 眞、真宗と宗乗—存覚の著述を通して—、日本女子大学大学院文学研究科紀要、査読無、16、2010、73-86、
- ⑧ 永村 眞、遍智院成賢の教説と聖教、『醍醐寺の歴史と文化財』、査読無、勉誠出版、2011、119-150、
- ⑨ 藤井雅子、「南北朝期の動乱と醍醐寺—主に報恩院隆舜を通して—、『醍醐寺の歴史と文化財』、査読無、勉誠出版、2011、189-222、

- ⑩ 永村 眞、密教における「相承」の意義、『密教学研究』、査読有、43 号、2011、29-45、
- ⑪ 永村 眞、貞慶と興福寺、『解脱上人貞慶』、査読無、奈良国立博物館、2012、6-11、
- ⑫ 永村 眞、親鸞と良忠—その教化と教説—、査読無、2012、159-177、
- ⑬ 永村 眞、三宝院賢俊と尊氏、『足利尊氏』、査読無、栃木県立博物館、2012、145-149、
- ⑭ 永村 眞、中世鏝阿寺における堂宇と法会、査読無、東京藝術大学、2012、16-22、

[学会発表] (計 12 件)

- ① 永村 眞、遍智院成賢の教説と聖教、シンポジウム「醍醐寺の歴史と文化財」、2009 年 11 月 15 日、日本女子大学、
- ② 永村 眞、伊予国分寺文書の特質、四国中世史研究会、2010 年 8 月 21 日、香川県立文書館、
- ③ 永村 眞、親鸞の下野教化、栃木県歴史文化研究会、2010 年 8 月 28 日、栃木県立博物館、
- ④ 永村 眞、密教における「相承」の意義、日本密教学会、2010 年 10 月 21 日、種智院大学、
- ⑤ 永村 眞、「東草集」と根来寺、巡礼記研究会、2011 年 10 月 22 日、神奈川県立金沢文庫、
- ⑥ 永村 眞、中世鏝阿寺と寺僧、シンポジウム「中世建築における様式研究の再考」、2011 年 12 月 10 日、東京藝術大学、
- ⑦ 永村 眞、戒律の論義、戒律分化研究会、2012 年 1 月 21 日、神奈川県立金沢文庫、
- ⑧ 永村 眞、貞慶と興福寺、奈良国立博物館公開講演、2012 年 4 月 14 日、奈良国立博物館、
- ⑨ 永村 眞、寺僧と聖、荘園研究ワークショップ、2012 年 6 月 4-6 日、南カリフォルニア大学、
- ⑩ 永村 眞、鎌倉時代の東大寺再建、「頼朝と重源」展公開講演会、2012 年 7 月 22 日、東大寺、
- ⑪ 永村 眞、三宝院賢俊と尊氏、「足利尊氏」展公開講演会、2012 年 10 月 27 日、栃木県立博物館、
- ⑫ 永村 眞、平安時代の東大寺、東大寺グレートブッダ・シンポジウム、2012 年 12 月 8 日、東大寺

[図書] (計 3 件)

- ① 永村 眞、藤井雅子等、醍醐寺文書聖教目録(三)、勉誠出版、2008、895、
- ② 永村 眞、護国寺日記目録、日本女子大学、2010、61、
- ③ 永村 眞、藤井雅子等、醍醐寺の歴史と文化財、勉誠出版、2011、330

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等 無

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

永村 眞 (NAGAMURA MAKOTO)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：40107470

### (2) 研究分担者

藤井雅子 (FUJII MASAKO)

日本女子大学・文学部・学術研究員

研究者番号：20110084

高山有紀 (TAKAYAMA YUKI)

新島学園短期大学・キャリアデザイン学  
科・准教授

研究者番号：40279568

岡本綾乃 (OKAMOTO AYANO)

神奈川県立金沢文庫・研究員

研究者番号：40443410

### (3) 連携研究者 無